

Lib

京都産業大学図書館報

● Vol. 41, 増刊号 (Dec. 17, 2014)

発表!

第10回

京都産業大学図書館書評大賞


入賞者発表	2
選考結果と全体講評	3
入賞作品および講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-11
<佳作>	12-21
アンケート	22
統計	23
概要	24




入賞者発表

第10回京都産業大学図書館書評大賞には107篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。


各賞ごと氏名の50音順



大賞		
氏名	所属・年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
てはら 手原 ひろか 啓花	法学部 法政策学科 4年次生	原点を見つめ直す 『愛着障害：子ども時代を引きずる人々』(岡田尊司著)



優秀賞		
おおこうち 大河内 けんご 健吾	経営学部 経営学科 4年次生	「責任」の所在と大企業の体質 『空飛ぶタイヤ』(池井戸潤著)
こむら 小村 こうへい 晃平	経営学部 経営学科 3年次生	地に足の着いたヒーローとしての御手洗潔 『異邦の騎士』(島田荘司著)
むらかみ 村上 りさこ 理佐子	文化学部 国際文化学科 2年次生	サリンジャーの世界 『ナイン・ストーリーズ』(J.D. サリンジャー著；柴田元幸訳)



佳作		
かやした 栢下 りゅうすけ 隆介	経営学部 ソーシャル・マネジメント学科 3年次生	渇き。 『果てしなき渇き』(深町秋生著)
きたむら 北村 わたる 亘	経営学部 経営学科 3年次生	危機を目の前にしたリーダーのあり方 『予測できた危機をなぜ防げなかったのか？：組織・リーダーが克服すべき3つの障壁』 (マックス・H・ベイザーマン, マイケル・D・ワトキンス著；奥村哲史訳)
ぬまた 沼田 てつろう 哲朗	文化学部 国際文化学科 3年次生	歴史の導き手としての本の書評 『中世のなかに生まれた近世』(山室燕子著)
のど 能登 ほのか 穂乃果	文化学部 国際文化学科 2年次生	なつかしく切ない気持ち 『マイ・ロスト・シティー』 (スコット・フィッツジェラルド著；村上春樹訳)
やまだ 山田 けんじ 賢治	文化学部 国際文化学科 2年次生	悲しい現実を乗り越えて 『赤い小馬』(スタインバック著；西川正身訳)

選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 井尻 香代子

小学生の頃、図書室は学校の中で一番好きな場所でした。歴史や伝記もよく読みましたが、日本や世界の民話や物語が何より楽しくて、借り出して家に帰るのが待ちきれず、下校中の道端に座り込んで読み始めることもよくありました。新しい本を開いて未知の世界に入っていき時のときめきは、小学校の司書の先生の面影とともにはっきりと思い出すことができます。ところが、中学校に入り生徒会や部活動を始めると、急に読書量が減り、高校の図書室となると、ほとんど記憶に残っていません。

先日、「第60回読書調査」の結果が新聞に掲載されました。全国学校図書館協議会が新聞社と共同で、全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について、30年以上おこなってきた調査です。毎年定例の調査項目は、その年の「5月1か月間に読んだ本の冊数」「読んだ本の書名」「5月1か月間に読んだ雑誌の冊数」「ふだん読んでいる雑誌名」ですが、2014年5月1か月間に読んだ本の平均冊数は、小学生が11.4冊、中学生が3.9冊、高校生が1.6冊となっています。私の子供時代は遠い過去ですが、本についての自分の記憶とこの結果とは、ぴったり重なり合っていました。皆さんはいかがでしょう。

原因はさまざまに分析されていますが、私の実感からいえば、児童書から大人の本への移行がすんなりいかず、読書の喜びから遠ざかってしまったことだったようです。しかし幸いなことに、私は大学生になって再び図書館に通い始め、本が開いてくれる世界に再会することができました。

今年で第10回を迎えた本学の図書館書評大賞は、もちろん読書家の学生さんも参加しますが、私のように一旦疎遠となってしまった本との再会を促す取り組みでもあります。7月2日（水）に直木賞作家の石田衣良氏をお迎えして開催した書評大賞講演会のテーマは「本、別世界への扉」でした。石田氏は、読書は「どんなものでも良いので手に汗握って読む感覚を覚えること」が大事で、「知識を積み上げていき、心の中に自分の強みを持ってください。世の中を渡っていくときの猛烈な武器になります」など熱く語りかけられ、質疑応答の時間には多くの質問者の手が次々と挙がり、会場は盛り上がりました。

第10回図書館書評大賞は7月1日から9月17日まで募集され、重複応募（同一内容の応募）を除く実応募数は107篇（88名）でしたが、応募要件外のものを除いて、105篇が第1次選考の対象となりました。第1次選考は書評大賞選考委員会の委員（教員と事務職員）が2名1組計5組あたり、それぞれ3段階で評価しました。その結果、22篇が第2次選考に残りました。第2次選考は11名の書評大賞選考委員が日本語の体裁、内容の要約、批評する力を基準に審査し、大賞1名、優秀賞3名、佳作5名を選びました。

大賞は法学部法政策学科4年の手原啓花さんで、岡田尊司著『愛着障害：子ども時代を引きずる人々』を評した「原点を見つめ直す」でした。手原さんは、‘愛着’の形成を人間関係の根幹に据えて現代社会の問題点を鋭く指摘する本書について、その魅力を分かりやすく筋道立てて分析しており、‘私も読んでみたい’と思わせる見事な作品となっています。手原さんは昨年度の佳作に続き、2回目の入賞となりました。

優秀賞は、経営学部経営学科4年の大河内健吾さんの池井戸潤著『空飛ぶタイヤ』、同じく経営学部経営学科3年小村晃平さんの島田荘司著『異邦の騎士』、文化学部国際文化学科2年の村上理佐さんのJ.D. サリンジャー著『ナイン・ストーリーズ』を対象とした書評でした。いずれも内容を的確にまとめ、独自の視点からの掘り下げを持った優れた作品でした。

今年は、入賞作9篇が法学部、経営学部、文化学部の3学部からの応募作となりました。これらの学部、学年の学生さん方の達成を喜ぶと同時に、より多彩で多数の応募者を来年の書評大賞には期待したいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方、図書館職員の方々、そして、ご協賛頂いた京都産業大学同窓会、丸善株式会社、株式会社紀伊國屋書店、株式会社雄松堂書店の皆様にご心からお礼を申し上げます。



大賞

てはらひろか
手原 啓花



書名：『愛着障害：
子ども時代を引きずる人々』

著者：岡田尊司

出版社・出版年：光文社，2011

「原点を見つめ直す」

「人間関係で悩んだことがない」という人はいないだろう。上手く自分を出すことができない、気を遣いすぎてしまう、人との関わりを避けてしまう、拒否されることや傷つくことに敏感になってしまう、といった悩みを抱えた経験や、現在もそのような悩みを抱えている人は多いのではないだろうか。その悩みは、人が他者と関わりながら生きていく限り、尽きることはないのかもしれない。しかし、多くの人は他者と関わりを持つことが人生を豊かにすると考えているし、その関わりの中に幸せを見出している人もいる。では、その他者との関わり方の原点、つまり人間関係の根底にあるものは何だろうか。どうして人は人と繋がりを持ち、仲間や家族をつくり、生きているのか。

その人間関係の根底にあるものに本書は注目している。それが「愛着」である。この「愛着」を本書では「特別に選ばれた存在との絆」と表現しており、その愛着がどのように形成されていくのか、愛着の型やその特徴、愛着のスタイルがその人の人格や人生にどのように影響しているのかを、専門的な知見から考察・指摘しており、読み応えのあるものとなっている。加えて、誰もが知る文豪や著名人の生い立ち・背景などに触れ、彼らの作品や行動を「愛着」という視点から分析しており、専門的な知識のない者にも読みやすい専門書となっている。この点は、本書の魅力であると言える。

題名からも分かるように、本書は「愛着障害」を扱う本であり、副題にも「子ども時代を引きずる人々」とあるため、普通の人にとっては「自分とは関係のないもの」だと思われるだろう。現に私も論文作成のために本書を手にとったのであるが、読んでいくうちに、本書に書かれた内容と自分を照らし合わせて読んでいくことに気づいた。その照らし合わせの中で、自分の行動を理解し、分析していたのである。本書は限られた人に向けられたものではなく、誰にとっても関係のある内容を取り扱っており、しかもそれは、人にとって欠かすことのできない他者との関わりや自分自身を理解し、再認識するのに役に立つ視点を与えてくれるものであったのだ。その助けとなっているのが、各所に見られる自己診断である。四章には自己診断用の成人愛着検査、巻末には45の質問に答えて愛着スタイルを診断するものまで用意されており、本書の内容を自分へと還元することができる工夫がなされている点が面白い。自己診断を実際に行い、本書の内容を再度読み込むことで、自分と関わりのあるものとして理解を深めていくことができるのである。そして、本

書で得た知識や視点は、日常生活のとりわけ対人関係において、自分自身の行動の理由や関わりを持っている他者の行動を理解するのに役に立つものとなる。

このように、一般的にも読みやすいと言える専門書ではあるが、やはりこれははれつきとした専門書である。愛着障害を発達障害やパーソナリティ障害、依存症などの精神疾患、子どもの非行などと関連付けており、子どもの発達や精神分析に興味がある人にはぜひ本書を勧めたいと思う。私自身も子ども虐待に関心があり、その論文を書く際に参考にしたのであるが、今までなかった視点を得られたことや、複雑な問題の根底にあるものに気づくことができたように思う。「愛着」という視点から分析することで、今までと違った見方で問題を把握することができたのである。そしてそれが、問題解決の一助になるかもしれない。その意味で、専門書として有能な書物であると言えよう。また、著者は現代の「愛着を軽視してきた合理主義社会の破綻」を指摘しており、社会問題全てに関わる人に対して警鐘を鳴らしているように感じる。社会に関わる人全てに、原点となる「愛着」の重要性を再認識してほしいという著者の思いがある。その点をふまえて、本書を読み進めていくことを強く勧める。

本書が専門的でありながら普遍的な内容も扱っているものであり、どんな人にも何かしらの気づきを与えてくれ、興味を抱ける内容となっているのはなぜか。それは、冒頭の部分で述べたような人間関係に関することや、自分自身に関すること、家族のこと、子どものこと、はたまた恋愛や仕事、社会的な成功など全てに「愛着」が関わっているからである。それがどのようなメカニズムで影響しているのか、気になった人はぜひ本書を手にとってほしい。きっと自分自身に対する気づきや人間関係の原点を見つめ直すことができるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山 茂樹

とてもよくできた書評です。それは、この書評が、客観性を確保しつつも、この本が述べようとしていることに寄り添っているからではないかと思いました。

この本は専門的な知見を（専門家に限らず）一般の人々に届けようとする内容です。それは、著者が、その知見が一般の人々の現実の生活に役立つものであり、それを人々に届けたいと考えているからでしょう。この書評は、この本を読むかたちでその著者のメッセージを届けられた書評者が、そのメッセージをまさに自分の生活実感に照らして受けとめ、その内容を分析しつつ、ほかの人々に自分の言葉で伝える内容となっています。それがこの書評に説得力を与え、高い評価につながったのだと思います。

また、書評者の文章そのものが論理的で筋道だっていることも、対象の本の内容と適合的で、安定感を与えています。途中でひっかかることなく流れるように読める文章は、なかなか書けるものではありません。

あえていえば、やや対象の本に寄り添いすぎかもしれないかもしれません。内容を批判的に検討する視点がもう少し出ていれば、さらにより書評になったのではないかとも思いました。

入賞者から一言



この度はご選出いただきありがとうございます。卒業前のよい記念になりました。

書評を書くということを通して、自身の文章力を磨くことができました。

このような機会を得られたこと、感謝致します。

今後とも読書に励み、深い教養と人間性を身につけていきたいと思っております。

第 10 回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

経営学部 4 年次生

おおこうち けんご

大河内 健吾



書名：『空飛ぶタイヤ』

著者：池井戸潤

出版社・出版年：講談社，2009

「責任」の所在と大企業の体質」

本書では、赤松社長が経営する小規模運送会社のトラックからタイヤが外れ、歩行者を直撃して死亡させるという事故があり、トラックの製造元であるホープ自動車との責任を巡った争いを中心として展開していく。

物語は、主に 3 人の視点から描かれている。1 人は事故を起こしてしまった赤松運輸の赤松社長、2 人目はホープ自動車の販売部の課長であり、エリートとして将来の出世が見込まれている沢田、3 人目は、ホープグループのホープ銀行で、本店営業の職に就く井崎だ。そこに加えて、事故によって生活が一変してしまった赤松家の家庭事情を描写することで、企業の責任問題との共通点を読者に効果的に伝えている。

本書の中では、特に“責任の所在”はどこにあるのかという点に力を入れて書いており、そこから大企業特有ともいえる経営体質の傲慢さが浮かび上がってくる。事故後、赤松運輸は整備不良が問題であると指摘され、警察に取り調べを受ける事になるのだが、本文を読み進めていくうちに、事故の原因は整備不良でなく自動車製造される段階で欠陥があったためだと次第に明らかになる。赤松社長はその事実を確かめるべく、事故原因となった部品の返還を求め、外部機関に調査を試みようとするが、沢田を始めとした、欠陥を認めないホープ自動車の社員からは「すでに調査済みであり、返還できない」という対応を受ける。

本書中では、“大企業ホープ自動車”と“小規模運送会社”の対比がされているのだが、やはり大企業に対する信頼というものが圧倒的に強く、それは一般消費者だけでなく、大企業で働くエリート社員もまた同様であるという描写が何度もなされており、彼らはまさかうちの会社がそんなことをするはずがないという固定概念に執着している。販売部に勤める沢田もまたそんな社員の一人であり、当初は赤松運輸のことを相手にもしなかったが、T 会議という狩野常務取締役を中心とした、企業の上層部で密に行われているリコール隠しの実態を知ったことで、会社の存続と自らの正義感の狭間で葛藤するようになる。そして、ホープ銀行に勤める井崎もまた、リコールの実態を知り、融資の決断の是非に葛藤する。そして最後には、沢田が自らの出世を捨てて警察に内部告発をし、井崎も融資を断る決断をすることとなり、ホープ自動車は社長以下重役が逮捕され、ライバル会社に吸収合併されることとなる。

本作におけるホープ自動車は、まさに「悪」であり、誰もが読み進めるうちに憤りを感じる事だろう。しかし、筆者は単に悪を打ち倒すストーリーを書きたいのではなく、その悪の恐ろしさを伝えようとしている。被害者の視点に立てば責任の所在はどちらにあるかは一目瞭然であるにもかかわらず、赤松運輸の疑惑が晴れるのには半年以上を要した。そこにはやはり、利益重視で責任を出来るだけ負わないでおこう、出来るだけ軽くしようという大企業の企業体質が大きく関係している。そして、企業の規模が大きくなるにつれて、世間の評判や社員の意識から問題を隠ぺいし続ける体質に変わり、その結果、業績を伸ばした企業規模をより拡大し、より多くの事故や問題につながるという悪循環が起きてしまっている。本作中では、沢田や井崎のような、会社の利益や方向性に背いた社員がいたため悪を打ち倒す事が出来たが、実際の社会ではわが身可愛さに隠ぺいを繰り返す企業があってもおかしくない。実際に作中ではホープ自動車の欠陥に気づきながらも泣き寝入りをしてしまった中小運輸会社が何社も登場する。組織の規模が大きいほど、社員は会社の意向に無条件に従い、自らの行動の善悪について考える事を止めてしまうという恐ろしさが作中では示されている。

この責任逃れの連鎖を防ぐ為には、企業の代表である社長の存在と、事業間の風通しを良くすることが欠かせないだろう。ホープ自動車では、社長はリコール隠しの黒幕である狩野の言いなりであり、製造事業も責任追及による成績の低下を逃れようとするばかり、事業間の連携や情報共有も十分になされていなかった。この2つの要因を改善する事が出来れば、責任の所在の言及に消極的な企業体質も改善するだろう。しかし、改善が出来ないのであれば、企業活動を中立的に監視する機関を社内(外)に設置しなければならない。

本書を多くの人に読んでもらう事が、「会社は自分達のものでなく、提供するサービスや製品を利用する消費者のものである」という当たり前の事を思い出し、第二第三のホープ自動車が世に出ないことにつながるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 北村 紘

近年、企業の社会的責任が重視されるようになってきている。本書評の価値は、企業の社会的責任に関心を持つきっかけとして、本書がうってつけであると思わせることに成功していることにあるだろう。本書は、実際の事件をもとにし、自動車のリコール制度にかかわる法令違反を犯した企業とその利害関係者の顛末を描いた小説である。評者は、フィクションを題材にしながらも、自身の正義感と問題意識にもとづいて現実の企業が潜在的に抱えている問題点を鋭く指摘し、さらに政策的議論を喚起することで、娯楽にとどまらない有意義な読書スタイルを提案している。ただし、最後の「会社は自分達のものでなく、提供するサービスや製品を利用する消費者のもの」という主張は教員としては気になった。こうした表現は、強い印象を与えるため、効果的かもしれない。しかし、大学生として、きちんと企業の所有権と社会的責任との関係を理解していることがわかるようにはしてほしいと感じた。これら2つの関係をきちんと整理して議論した方が、より高い評価を得られたのではないかと思う。

入賞者から一言



優秀賞という名誉ある賞に選んでいただき、ありがとうございます。まさか自分の書評が選ばれるとは思っていませんでした。学生に限らず、社会人になってからも出来るだけ本に触れる機会を作っていきたいと思います。



こむら こうへい
小村 晃平



書名：『異邦の騎士』

著者：島田荘司

出版社・出版年：講談社，1998

「地に足の着いたヒーローとしての御手洗潔」

推理小説、探偵小説は数あれ、その愛読者は多くはないらしい。作者の島田荘司は本格ミステリと呼ばれる、推理小説の一つのジャンルのものを数多く書いている作家であり、この作品も「御手洗潔シリーズ」という探偵ものの一つである。この作品は作家「島田荘司」として最初に書いたものであったが9年もの間、机の引き出しの中に放り込んであったと後書きにある。初期に書かれたのが理由か、ミステリとしてのトリックや謎解き要素の印象は後に発表されたものと比べると決して強くはないが、その分登場する人物たちの魅力がより身近に迫るものとなっている。

この作品の大筋は、主人公である記憶喪失の男が生活のなかのあるきっかけから探偵と出会い、あれこれして記憶を取り戻すというものである。文はすべて過去形になっていることからすでに過ぎた日々であったことが窺え、読者はある種守られた位置から人物とリンクすることとなる。過去形での語りは小説ではよくみられる手法であるが、『異邦の騎士』において「過去」はショックを和らげるクッションとしての役割を持って使用されている。作品中には凄まじい衝撃を受けるシーンもあるが、この部分には「日記」が用いられており、緩衝材として意図的に過去に設定したことが分かる。

このように巧みな設定は人物にもみられる。主人公は記憶喪失であり自分のことが分からない。予備知識が少ない読者と同じ立場になっていることによって、より作品世界に感情移入しやすい作りになっている。また記憶障害は作品全体を通して感じられる不安を演出するものとして一役買っている。作品の冒頭部分、見知らぬ公園で主人公が目覚めるところから物語は始まるが、ここの展開のリズムが非常に巧みである。目が覚め記憶をなくしていることに思い至るまでの思考が日常生活のようなテンポで描写されるため、読者はより身に迫る不安を感じるようになる。また記憶喪失の度合いが名前や住所などのパーソナルな部分であり、文化的な生活には支障はない程度で抑えられている。ここに生じるある種の余裕が主人公の興味や眼を動かすものとなり、しかしなお記憶が戻っていないために不安を感じさせ、これは作品を通して感じられる仕掛けとなっている。

また、いわゆる「探偵」としての御手洗潔の「人間臭さ」と「超人」の度合いのバランスが丁度良く、これは作品の魅力として欠かせないものとなっている。推理小説における探偵役は多くが主人公であるために、超人的な頭脳を誇張して描かれやすい。もちろん推

推理小説を読む以上は登場人物よりも先に解決したいと思うし、解けずに探偵役の滑らかな解説を見るのも気持ちの良いもので、探偵役はただの答え合わせ役ではない。探偵は明確なゴールであり、競争相手であり、読者として謎と作者に対峙する心持で挑むからには、快く受け入れたいとも思う。しかしながら非凡な才能を示すために話のなかでは、発言が飛躍しているように感じられてしまうところがあるのもまた事実である。探偵が物語の最後にだけでてくる推理小説が少ないのは、「探偵の突飛な発言をする変人のような側面」の影を薄くするためであろう。ミステリである以上、『異邦の騎士』においても探偵役の存在は重要であるが、その役目は事件を解決するに留まることは無く、より大きな物語としてのカタルシスに関わる役割をもってある。そのため御手洗潔は物語の前半から登場しており、キャラクターとして掘り下げ読者に御手洗潔を印象付けることによって、「変人」から大きな役割を背負うにふさわしいものへ昇華することに成功している。

これには読者から見た人物を正確にとらえることが必要になり、このあたりの機微を理解し、難なくこなしているのが島田荘司作品としての魅力の一つであることは間違いない。この手際は見事なもので、御手洗潔もご多分に漏れず変わり者の域を出ないが、その発言の節々に人間らしい不完全さを見ることが出来るようになっている。

この本を改訂する際に一人称が変化していくところを加えたそうで、ここに注目して読み進めると、人物の心情の変化がとらえやすくなっている。今なお作家として現役で活動し続けている作者であるが、この作品の後書きでは「もうこのような作品は二度と書けないだろう」といっている。先に述べた作品の根底を流れる不安感や寄り添なさは作者が若いとき、30代の心身ともに揺れ動く時期に作られたからこそその生々しさであり、御手洗潔はそんな時に「眼前の幻として臉に捕らえた」と、当時の様子を後書きに詳しく書いている。このような日々の葛藤の中で生まれた登場人物たちが生き生きとすることは至極まっとうな事であり、求められて現れたヒーローは今なお読者を魅了してやまない。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 柳下 浩紀

記憶喪失の主人公は作品中盤に自分の（ものと思われる）日記を発見するのだが、この日記は主人公を利用しようと目論む者の手による虚構であることが、御手洗潔という風変りな占い師を通して作品終盤に主人公と読者に明かされる。御手洗は作品前半から登場しているのだが、彼が探偵役であることはこのときまで明示されない。

さて、この書評は作品の雰囲気をよく伝える良い書評であり、それ自体が短い物語として楽しめるものであると思う。書評が述べていることは頷ける点が多い。例えば、この作品は主人公の視点から一人称で書かれているのだが、作品全般に渡って現在形と過去形が混在して用いられ、過去形で書かれた文章は現在から過去を客観視し、少し距離を置いて視ているような印象を読者に与える。また、終盤の御手洗による種明かしの辺りで徐々に主人公の人称語が「俺」から「私」に変わっていくのだが、この変化によって主人公の心情変化が上手く表現されている。

入賞者から一言



入賞することが出来、驚きました。なにぶん小学一年生の時以来、「賞」とつくものとは縁遠い生活を送ってきたため、受賞を知った時は喜びよりも動揺が先に立ち、夢ではないかと疑ってしまいました。自分の好きな本について書いたものが、評価されたことをうれしく思います。

第10回 京都産業大学図書館書評大賞



文化学部 2年次生

むらかみ り さ こ
村上 理佐子



書名：『ナイン・ストーリーズ』

著者：J.D. サリンジャー著；柴田元幸訳

出版社・出版年：ヴィレッジブックス，2012

「サリンジャーの世界」

『ナイン・ストーリーズ』はその名の通り、著者ジェローム・デイヴィッド・サリンジャーが自身で厳選した九つの物語を収録した短編集である。作品内では、戦争や戦争が原因で精神病を患った登場人物について、ときにはサラッと触れられていたり、ときにはそれが物語の中核を担っていたりする。それにはサリンジャーが実際に戦争を経験したことが影響していると言える。サリンジャーは太平洋戦争が勃発した1942年に自ら志願してアメリカ軍へ入隊し、2年間訓練を受け、1944年にイギリスへ派遣されノルマンディー上陸作戦に一兵士として参加した。激戦をくぐり抜けたもののサリンジャーは戦争で精神的に追い込まれ、神経衰弱と診断された。このサリンジャーの過去が特に強く表れている作品が「エズメに――愛と悲慘をこめて」である。

アメリカ人下士官の一人としてイギリス諜報部の行う特殊講習を受講するため、「私」はイングランドに滞在していた。三週間の講習を終え、街に出向く。その際イギリス人の姉弟に出会い、束の間のティータイムを楽しむ。別れ際、少女は文通の提案をし、「私」はそれを快諾し住所を少女に教える。そして終戦後の場面へと物語の時間軸が飛び、「私」による一人称視点から三人称視点へ変わり、主人公Xが戦争により神経衰弱になった姿が描かれている。今にも壊れてしまいそうなXの精神、そんなとき開封せずに山積みになった郵便物から顔を出すある一通の手紙にふと目が留まる。何度も修正された跡が残った宛先、それはイングランドで出会った姉弟からの手紙であった。そしてXに「突然、ほとんど恍惚というに近い気分とともに、眠気が訪れる」。「私」の視点で描かれるコメディ色が強い前半に比べて、Xを描写する三人称の視点で語られる後半は非常に悲劇的な物語になっている。しかし、悲壮なまま終わるのかと思われる物語最後の一文によって希望の光が見え、救われる。前半から後半へと場面が転換する前にサリンジャーは「きわめて狡猾に変装しているため、いかに鋭敏な読者でも私とは認知できぬであろう。」という言葉を挟んでいる。この変装というのは外見の変装ではなく、精神的な変装である。つまり後半のXは神経衰弱となった「私」であり、前半とは異なる精神状態だということを指している。この短編はサリンジャーの経験があったからこそ出来た傑作だと感じた。

『ナイン・ストーリーズ』からもう一作、「バナナフィッシュ日和」を紹介しよう。これまで私は、すべての小説の登場人物が話すことは少なからず何か意味や意図が含まれてい

ると思っていた。発言自体にそのことが明確に表れてなくても、文脈から意味を汲むことができる。学校の国語の授業でそう教わってきた。しかし「バナナフィッシュ日和」を読んだ際、その教えを実践できなかった。登場人物たちは会話をしているのだが、どこかちぐはぐで掴めない。必死に意味を探ろうとしたが何度も読むうちに本当は意味なんて無いのではないかと、そう考えるようになった。なぜならシーモアという男は戦争で精神病を患い、彼の言うことは意味を持たない空想ばかりであるからだ。しかもそれに加えてシーモアの妻とその母親が会話するシーンでは話が次々といろんな場所へ飛ぶ。しかし、よく考えてみると、こうしたことは現実でもよく女性同士の会話で見受けられることである。私達の日常の会話は理路整然とすすむよりも、むしろ、とりとめなく続くことが多いのではないかと。私もそれを実感したことが数え切れないほどある。その際、私が発言したことや相手が発言していることはそんなに深く意味を持たず、話の繋ぎくらの感覚で発言している。その中に理屈では表せない心の機微がにじみ出てくるのだ。サリンジャーの作る物語はそういったリアルな要素と意味不明な要素が上手い具合に混ざり合っていてバランスが取れているところに面白さがある。

このように『ナイン・ストーリーズ』の作品は、一読しただけでは物語の全貌を把握することはできないかもしれない。しかし、何度も何度も繰り返し読むことで新たな発見を楽しめる。白黒ははっきりしない物語が嫌いな人は、読後にモヤモヤ感が残る作品ばかりで合わないかもしれない。しかし、そういう人もまずは一つ目の「バナナフィッシュ日和」だけでも読んでほしい。物語のラストに思わず目を見張るだろう。そしてまた1ページ目に戻って読み返すかもしれない。2ページ目を読むころにはもうすっかりサリンジャーの世界観に引き込まれているだろう。私がそうであったように。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 鈴木 雅恵

この文庫本には「原作者の要請により、本書には訳者あとがきは収録されておりません」という但し書きがあり、サリンジャーに関する解説は一切含まれていないのだが、評者も指摘する通り、このままさらりと読むだけでは、読者によっては、モヤモヤ感だけが残ってしまう可能性がある。

評者は賢明にも、本書に収められている九つの短編の中から、まず、作者の自伝的要素の濃い「エズメに――愛と悲惨をこめて」（原題 “For Esmé - with Love and Squalor”）の解説をし、その後で、「バナナフィッシュ日和」（原題 “A Perfect Day for Bananafish”）を論じる、という順番を取ることに、戦争体験の後遺症に悩まされる登場人物の「精神的変装」を中核とする「サリンジャーの世界」を紹介することに成功している。

しかし、サリンジャーの魅力の一つである「乾いたユーモアのセンス」を日本語訳で味わうには限界があるだろう。この書評を読んでサリンジャーに魅かれた諸君は、是非元の英文と対照しながら作品を味わっていただきたい。

入賞者から一言



まさか優秀賞に選んでいただけたらと思わなかったのですが非常に驚きましたが、大変光栄に思います。私の書評で少しでも『ナイン・ストーリーズ』に関心をもっていただけたら嬉しいです。この度はありがとうございました。



書名：『果てしなき渴き』

著者：深町秋生

出版社・出版年：宝島社，2007

「渴き。」

「劇薬エンタテインメント」、映画化に伴い使用されたキャッチコピーだが、まさに劇薬であった。この小説を知ったきっかけは、先ほど述べた映画化だった。物語は、藤島加奈子という一人の少女に魅せられ、振り回された人々の様子が描かれていた。

加奈子という存在は普通ではなく、普通に生きている人々を刺激し、惹きつけていく。日常を生きている人々は、普通であることに必死になる。しかし、非日常的な存在は、避けるべき対象であると同時に、興味や関心を強烈に惹きつける。非日常に足を踏み入れる勇氣はないが、非日常に対する興味は尽きない。私もその一人である。

物語が始まる冒頭のページから、グロテスクな表現が並べられている。そこに嫌悪感を抱く人は、少なくはないだろうと思った。しかし、好きな人からすれば、これからどうなっていくのか、という期待感が最大限に膨らまされたであろう。

藤島加奈子の父、“藤島”の視点と加奈子の同級生の“ぼく”の視点で物語は進んでいく。この二人に直接的な関係性はない。まず“藤島”は、家庭を顧みず、仕事に打ち込んできた元刑事であるが、乱暴な捜査から評判は悪く、妻の浮気相手に暴力をふるったことで辞職勧告を受け、警備員として働いている。そして、“藤島”が警備員として駆けつけた先で起きた、殺人事件から物語が始まっていく。

その後、連絡を取っていなかった元妻から、娘の加奈子が行方不明になっていることを知る。そこから“藤島”の娘の捜索が始まる。娘の失踪の真実に近づくにつれて、娘が一体何をしていたのかを思い知らされる。と同時に、娘はどういった娘だったのか、わからなくなっていく。だらしなく、どうしようもない“藤島”であるが、家族としてやり直したいという思いも持っていた。故に“藤島”を突き動かしているのは、加奈子への愛だと感じた。しかし、不器用であるがゆえに、それを表現する方法が普通ではなく、暴力であったり、周りが見えなくなったりする。“藤島”は、物語が進むにつれて狂っていくと同時に、父として、元刑事として、男として加奈子を追うようになる。今まで知らなかった加奈子を知っていくうちに、父親である“藤島”も加奈子に魅せられていったのかもしれない。

物語を進めていくうえで、“ぼく”という少年も加奈子に魅せられた一人だ。加奈子と同じ学校に通っているが、些細なことからいじめの対象になってしまったところを、加奈子に助けってもらってから、加奈子に対して好意を抱く。しかし、加奈子のことを知ろうとすればするほど、闇の世界へと誘い込まれていく。加奈子を追いかけていけばいくほど、“ぼく”自身も少しずつ狂っていく様子が描かれている。

“藤島”と“ぼく”は、時系列的にも関わることはないが、加奈子に魅了された人物の一人だ。では、多くの人を魅了する加奈子とは、一体どのような人物なのだろうか。容姿端麗で成績優秀と描かれており、人を惹きつける要素は備わっているようだ。しかし、果たしてそれだけなのだろうか。確かに人が羨むようなものを持ち合わせているが、彼女の本当の魅力は純粋さにあると思う。小説のタイトルにあるように、手に入れられるものを手に入れても、加奈子の渴きは潤わない。人には嘲笑っているように映るかもしれないが、その底知れぬ欲望は、純粋そのものとも見て取れる。その純粋さゆえに、周りの人間は加奈子に魅せられるのだろう。

一通り読んで、この小説には狂った人間しか出てこなかった。それだけキャラクターがしっかりしていて、個性が存分に表現されていた。狂った人々だらけの世界で、加奈子の純粋さがより目立っていた。

前述したように映画化されているので、映画を見てみるのもありだと思うが、原作をしっかり読んでほしいと思う。最後のページまで気が抜けない。現在の日本でも、あり得なくはない物語になっている。リアルな感じが伝わり、読み進めていくうちに、気付けばこんなに時間がたっていた、と思うこともしばしばあった。普段では体験できない、非日常の世界を小説の中で味わってほしい。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 寺地 徹

書評にだまされた！というのが、素直な感想である。書評には、本の紹介とその内容に関する評者の感想や評論などの機能があるが、この小説のようなジャンル（サスペンスや推理小説）では、ネタバレを防ぐために、話の筋や結末をすべて明かすことはできない。その制約のなかで、いかにして他人に、紹介しようとする本への興味を持たせられるかが、評者の腕の見せどころである。今回、『果てしなき渴き』への書評、その名も「渴き。」を読んで、思わず本を読みたくなった。その意味で、数多くの応募作品の中でも、この書評はすぐれたものであったと思う。

しかし、かなり厚めの文庫本を実際に読み始めてみると、これがなかなかしんどい。小説とはいえ、中できりひろげられる非日常の世界に、嫌悪感を覚えた。たぶんこの書評を読まなかったら、生涯手にすることもない本であったろう。チープなエログロナンセンス？もっとも、最近のニュースで報じられる、惨たらしい事件の背後には、この小説以上に恐ろしい現実がきつと潜んでいる。そう考えて、暗然たる気持ちになった。

入賞者から一言



書評大賞で賞を頂けると思っていなかったので、びっくりしました。と同時に、賞を頂けて嬉しく思っています。普段からよく本を読む方ではないのですが、書評大賞に参加することで、本を読んだり、図書館に立ち寄ったりするのが身近に感じられました。これからは、色んなジャンルの本を読んでみたいと思っております。



書名：『予測できた危機をなぜ防げなかったのか? : 組織・リーダーが克服すべき3つの障壁』

著者：マックス・H・ベイザーマン, マイケル・D・ワトキンス著 ; 奥村哲史訳

出版社・出版年：東洋経済新報社, 2011

「危機を目の前にしたリーダーのあり方」

2001年9月11日、あの歴史的な大事件が起きた。9・11世界同時多発テロである。世界中の人々を震撼させたあの凄惨なテロの発生を想像した人はいなかっただろう。本書では、9・11などの大事件を事例に挙げながら、なぜ防ぐことができなかったのか、どうすれば防ぐことができたのかといった視点で「予測できた危機」の明かされなかった実態を解明している。

予測できた危機とは、ある事象の発生とその帰結を予測するのに必要な情報すべてに、前から気づいていたにもかかわらず、個人や集団が驚きととらえる事象ないし一連の事象と本書では定義づけられている。そもそも9・11が予測できた危機に分類されること自体に驚愕する読者も多いと感じたが、なぜあれほどの事件の発生を想定していたのに防げなかったのか。それには、3つの障壁が立ちはだかっているからであり、その障壁は大事件にのみ当てはまるものではなく、我々の私生活レベルでも十分に起こり得る。人間に備わっている認知ヒューリスティクスという物事を単純化する思考パターンが招いてしまう心理的障壁、組織内に部分的に危険因子を把握している場所がありながらもそれが生かされない組織的障壁、自分たちの利益を優先するばかりで他者の不利益を厭わない政治的障壁である。この3つの障壁は危機を防ぐための過程で出てくる。危機因子の認識、数ある危機因子の優先付け、危機に対する動員という3つの過程である。

タイトルを見る限りでは分からない事なのだが、本書はリーダーシップ論との関係が深く、根本的に危機を防ぐにはリーダーの資質が必要不可欠であると論じられている。一見、個人・集団の思考が行く末を決める最大要素かのような書きぶりであるが、これらはリーダーの資質により左右される。一言にリーダーシップとってしまうと、「先頭で集団を引っ張る」、「絶対的な権力者」といったスポットライトを浴びる華やかなイメージが浮かびやすいが、実際はこのような単純なものではない。先に挙げた3つの過程に当てはめてみ

ると、最初の2つは個人的な力量が関係してくるが、最後の危機に対する動員については、集団を一方向に向ける必要があり、努力が求められる。本文の言葉を引用するならば、「支持を結集し、外部の重要な関係者を教育し組織内の重要な人たちの意識を集中させ、危機の予防をそれぞれの優先項目にする」ことであり、逆流の中を立ち向かう勇気と努力は欠かせない要素となる。

リーダーには、何千人を束ねる大企業の社長から数人を束ねる小学生の学級委員長というリーダーまで数えきれないほどの種類がある。もちろん、組織が大きくなればなるほどリーダーの手腕が重要視されるわけだが、それに従って、のしかかる重圧も大きくなる。そうすると、リーダーも安易な判断で組織を束ねることができなくなり、本書でいう予測できた危機を招いてしまう。このように考えるとリーダーの難しさというものを再認識する。それと同時にリーダーに向いているいないはもちろんあるだろうが、それ以前に経験や努力の必要性を強く考えさせられた。イメージするリーダーの理想像の裏には必ず見えない努力があり、歴史上でも常にそのような人物がリーダーになってきた。本書では9・11を予測できた危機としており、これはデータや資料などからの裏付けからするとそうだとと言える。しかし、いざテロを防ぐとなると大変な労力がかかることは間違いない。リーダーに資質が足りなかったと言えればそこまでだが、防げる事件だったと一言で済ませることはできない。本書は全てのリーダーが持つ悩みや課題を理論的に論じている。多少理想論であると思わせられた感もあるが、リーダーでなくても一読の価値は十二分にある完成度の高い本と言えるのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 北村 紘

潜在的に起こりえるにもかかわらず、まずありえないこととして見積もってしまう状況は確かにある。9・11テロへの対処についても本書によればその類の問題であるらしい。あわせてテロへの対処は、それが企業や行政といった組織・集団の意思決定により行われるという性質をもつ。そこで次のような問が生まれる。潜在的に起こりうる危機に際して、組織が間違った意思決定をしないために、リーダーはどのような役割を負うのか。評者は、この問に対して本書がどのように答えたかについて、キーワードを的確に抑えつつ順序だてて丁寧に解説しており、好感が持てる内容であった。加えて、本書が指し示す規範的な主張に対して、それを実践する上での課題について言及していることもこの書評の優れた点であろう。評者は、リーダー個人の経験や努力の重要性を指摘している。しかしながら、組織全体の努力を引き出すための法律・賃金・人事などの制度の設計という観点からも議論ができるのではないかと感じた。

入賞者から一言



この度は佳作に選出して頂きまして誠に有難うございます。これまで読書というものをあまりしてこなかったのですが、書評大賞への応募を通じて、読書への向き合い方を見直す良い機会になりました。拙い文章ではありますが、このような形で評価を頂いたことも何かの縁と思い、今後はより多くの本と接していきたいです。



書名：『中世のなかに生まれた近世』

著者：山室恭子

出版社・出版年：講談社，2013

「歴史の導き手としての本の書評」

歴史への探求の旅に是非この本を携えて。私がお勧めする最良の導き手となるでしょう。

『中世のなかに生まれた近世』は山室恭子氏初の著作で、山室恭子氏はこの本では日本史の中世、主に16世紀を取り扱い、戦国大名が発給・作成した文書を主題としている。彼らの発行した文書を分類、分析することで、それぞれの戦国大名の統治スタイルを探り出そうと試みているからだ。サントリー学芸賞思想・歴史部門を受賞した著作でもあり、1991年に吉川弘文館から中世史研究選書として刊行された。本書はその文庫版に当たる。

この『中世のなかに生まれた近世』の立ち位置としては、歴史上の文書の研究を自己や他の研究者の成果を踏まえつつ、全国規模と各地域を俯瞰的に捉え直し、その文書群から見える歴史の方向性を探り成果をまとめた著作ということになると思われる。歴史研究ではかなり網羅的な見地で、背景に広がりのある本ではないだろうか。

「むかしむかしあるところに（本書冒頭）」、ページを捲るとそんな説話ではお馴染みのフレーズから始まる「序」がまず目に飛び込む。これは「黒い王様」と「白い女王」の戦いの物語である。この一篇の文章は本書を読み終えずして意味を持ち得ないし、その真意を知るのは難しい。何故なら、一見して話から逸脱した「空想物語」に思えるが、この事始めこそ本書全体の要に繋がるし、後述の“総括”の主題の所以でもあるから。なにより読者を次のページへと奔らせる“おもしろさ”がある。

著者の筆致はユーモラスだ。「序」のような物語性も併せ持ちつつ、これはれっきとした学術書なのだ。本格的な内容に入っても、直接語りかけてくるような文章も特徴的だ。学術書として刊行されたこの本と出会ったとき、私は驚嘆するしかなかった。こんな形があるのだと思知らされたからだ。

その一方で、著者は暗喩的に本書と「本」自体の限界を語っているように思えたというのは、私見に止めたい。冒頭から引用した「あくまでも現在残された文書の世界の中での話に過ぎない（本書p.4）」という一説が、広範な歴史背景を踏まえていると伺わせる。このような感触が随所の文章に見受けられる。私が本書を広がりのあるものだと評価する所以だ。これは是非、本書を読んでどう感じるかご自身で確認して頂きたい。

目次を一瞥すると、本書が地域別に俯瞰しようとしていることが分かる。まず後北条氏から始まる「東国の大名たち」を巡って、後は毛利氏を始めとする「西国の大名たち」が居並ぶ。「中括」を挟んで、伊達氏を含む「東北の小宇宙」を通過すると、「天下人たち」となる。そして「黒と白と――旅のおわりに」で結論を出して本書を閉じている。

具体的な内容では、全体的には著者自身が蒐集^{しゅう}した膨大な天下人を含む戦国大名の作成した文書群を中心に進められている。その文書群を各地域の大名ごとに総じて17項目の分類を行い、時間的かつ空間的な把握に努めている。

今ひとつ特筆すべき点は、著者が本書を編む際には既にある程度のデータと理論の構築、結論が揃っているはずだが、著者はそこから出来上がった歴史像から本書を始めてはいない。結論ありきの編み方をしたくないのだろうか。読者の読み始めるページから一つ一つデータを分析し、突き合わせ、まとめ、自分の考えや思考の道程をも提示し、論理を構築していく、その過程自体を本書で詳^{つまび}らかに述べ上げていく。時に自身の思考の逸脱を戒めることもあるのは、自らの理論と思考の暴露の裏返しなのだろう。

また、本書では著者自身あるいは他者の研究の成果を踏まえつつ汲み取り理論を構築している。今までの様々な研究成果の流れの中に本書を置いていて、本書自身がまたその研鑽^{けんざん}の報告の場であるようだ。山室恭子氏はあくまでも甚大な歴史研究の流れの一点であることにこの著作を置いているようだ。

時に著者は自身の立場を暴露しつつ、この本で示した歴史像が自己の主張であることを踏まえているし、記載さえしている。萎縮気味ではないか、とも思わせてしまう箇所もある。しかし、力強い文章だ。山室恭子氏は本著の中で、自らの結論を躊躇せず提示し、尊重と尊敬を忘れないようにしつつ、それまでの通説や他の研究者の主張が自身の考えと相容れないのであれば躊躇なく踏み込んで異議を唱えている。

評価のポイントとしては、膨大なデータをまとめた上で、文章が理論構築の過程を踏んでいるので読者は読みやすいだろう。先述のように、著者は自身の思考回路を暴露してしまう。弱さも、逸脱も、しかしそれが“理解しやすい”文章を構築している。時として人間臭い文章を垣間見せるのはその一端だろうが、それもまた本書の魅力に数え上げたい。

『中世のなかに生まれた近世』は中世史を取り扱った歴史の学術書であるが、題名からもわかる通り暗示的に「近世」が表現され、この本は「近世」に繋がる場面で締めくくっている。どんな人が読んでも損はさせない本の一つだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山 茂樹

本書評は、この本の独特の文体と著述の形式を的確にとらえ、歴史学の学術書であるこの本の「歴史の導き手」としての「おもしろさ」をしっかりと伝えている。また、自らの学問への畏敬とその魅力を伝えたいという意志も感じられ、読者を学問の世界にいざなう書評となっている。

もっとも、本書評には、この本の肝心の学術的主張の内容に関する説明がなく、そのため学術的に批評する力が足りないとする見方があるかもしれない。この点について、おそらく、書評者はこの本には学術書としてやや異例の「謎解き」的な要素があり、それゆえ読者がこの本を読む楽しみを奪いたくないと考えたのではないか。その工夫を積極的に評価するか消極的に評価するかで見方が分かれるかもしれないが、わたしはその書評的チャレンジを買う。この本の魅力を十分に伝えていると考えるからである。望むらくは、書名を正確に示すべし。

※編集委員注）本文中の書名は正しいものに修正しました。

入賞者から一言



初応募だったので入賞したことには驚きましたが、来年もできれば応募したいです。そのことでまた自分の糧になればと願います。その為にも、更に本を読んで、自身の考えも一つ深めることできるように頑張りたいです。



佳作

の と ほ の か
能登 穂乃果



書名：『マイ・ロスト・シティー』

著者：スコット・フィッツジェラルド著

；村上春樹訳

出版社・出版年：中央公論新社，2006

「 なつかしく切ない気持ち 」

『マイ・ロスト・シティー』は、6つの物語を含むスコット・フィッツジェラルドによる短編集である。短いページの中で、性別も年齢も異なる様々な主人公たちの体験とそこで生じる彼らの心情をじわじわと伝えてくる。6つの作品を通して印象的なのは、物語が持つ独特のリアリティだ。どの物語も、状況は違っても、主人公の中で誰もが経験する感情が生まれる。それは、例えば現実が思うようにいかないもどかしさや、意図が伝わらない寂しさや、忘れられていた記憶のむなしさ。このようななんとなく覚えのある感情が、読み手の心を引き付ける。また、この作品は村上春樹の初翻訳の短編集であるが、彼の独特の言い回しも相まって、物語が醸し出す雰囲気をもっと感覚的に伝えてくる本である。ここでは、中でも印象に残った2つの作品を取り上げたい。

まずは、「氷の宮殿」を。ジョージア州南部、蒸し暑い9月の昼下がり。19歳という本来なら若々しさあふれるはずの少女、サリー・キャロルが、古びた窓枠に頸をのせ外を眺め、けだるい時を過ごしている場面から物語は始まる。そこに「骨董品に近いフォード」にのった「げんなりした顔つき」の男友達が、地元の友達と遊ばないか、と誘いに来る。この場面からもわかるように、この物語では南部が、けだるくてさえない土地柄として表現される。一方北部は活発で明るい土地として描かれるのだが、文字を追うごとに様々なところに散りばめてある、南北の対照的な空気感を醸し出す表現が実に見事である。

さて主人公のサリー・キャロルはそんな単調でけだるい南部の暮らしを抜け出すため、北部の婚約者の家で1か月過ごしてみることになる。が、果たして北部に憧れるサリーの心はどう動くのか、そんな彼女のゆるる心に焦点をあて物語は進む。地元にいる友達の大切さ、居心地のよさ、慣れた会話の安心感。これらはどれも捨てがたいものだが、変わらない暮らしと無力感にはなんとなく抵抗がある。そして、サリー・キャロルのように、活気のある街に希望を抱きたくなる感覚は、誰しも心当たりがあるのではないだろうか。そんな彼女が北部に住んでいる婚約者やその周りの人々とのくらしで味わったのは、期待どおりの活発さだけではない。彼女が南部の故郷では感じたことのない、いやなねちっこさ、うざったさ……。人は良い面悪い面を持つもので、もちろんサリーも彼女が否定した南部

独特のけだるさをまとっているのだ。そんな気づきとともに彼女が選んだ選択は……。南部と北部を対照させる書き分けに注目したい作品だ。

もう1つ、ある作家と女優の結婚生活を描く「残り火」を紹介しよう。この物語は、結婚してしばらくたつ一組の夫婦が、年をとってもお互いを純粋な気持ちで思いあい、仲良くくらししているところから話が進む。「二人はどこまでも若々しく、こうして時を送って行くのだろう。自分たちがもう若くはないと突然気づくその日まで。」という美しい表現には、恋愛の持つ切なさや2人が持つ純粋さが表現されており、夫婦の心の内に読者はじわじわと引き込まれる。そんな和やかな生活のなか、夫のジェフリイが病に倒れ、植物人間のような状態に陥ってしまう。懸命に看病しながらも、快復への希望を失っていく妻ロクサンヌだが、物語が進むにつれて意識の戻らないジェフリイにより大きな愛情を抱くようになる。結婚当初からの2人の成長、気持ちの変化、変わらないところ。そんな「残り火」を描く表現は壮大で静かで悲しく、そして美しい。そこに物語の神髄が感じられる作品だ。

『マイ・ロスト・シティ』に収録されている物語は、どれも直接的な表現でメッセージを伝えることはない。しかし、日常のふとした出来事の中で揺れる登場人物の心理の機微をあらゆる台詞、何気ない風景描写によって読み手の心にメッセージを刻んでいく。そこから汲み取れるメッセージは直接的でないからこそ、読み手によってそれぞれ違うだろう。そして読者は、よくあるなつかしく切ない感情を心に刻みながら、自分だけに向けられた何かを漠然と受け取っていく、そんな1冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 鈴木 雅恵

これは『グレート・ギャツビー』の作者、スコット・フィッツジェラルドの短編集であると同時に、村上春樹の初翻訳集でもある。村上氏自身が「もしフィッツジェラルドに巡り合わなかったなら、僕は今とは全く違った小説を書いていただろう。」と断言しているように、彼の無国籍風な作風の源泉を垣間見るためにも、貴重な一冊であるといえる。

評者は六編の中から、恋愛や夫婦の関係の描写を中心とする「氷の宮殿」と「残り火」を選び、女主人公たちの心の動きに注目している。ただ、「残り火」に関して、評者は「この物語は、結婚してしばらくたつ一組の夫婦が、年をとってもお互いを純粋な気持ちで思いあい、仲良くくらししているところから話が進む」と説明しているが、実際には、結婚後一年の、将来に希望を抱く、25歳前後の夫婦の描写から始まり、その年のうちに倒れて植物状態になった夫を妻が献身的に介護する物語である。そうした読み違い(?)も含め、このかつてのアメリカの流行作家の「独特のリアリティ」から、「なつかしく切ない気持ち」を呼び覚まされる、という、若い評者の感性は興味深い。

入賞者から一言



自分の伝えたいことを文章で伝えるのはすごくむずかしくて、この書評を書くのにもすごく悪戦苦闘したので、佳作に入ったと聞いて本当に驚いています。どうやったら自分の感じたことをわかりやすく表現できるのか、必死に言葉を探しました。良い形に残せてよかったです。



書名：『赤い小馬』

著者：スタインベック著；西川正身訳

出版社・出版年：新潮社，1988

「悲しい現実を乗り越えて」

物語の舞台はカリフォルニアの大自然の中の小さな牧場。主人公はジョーディという名の10歳の少年で父、母、牧場で働くビリーの4人をメインに少しずつ異なる雰囲気を持つ4部の物語が展開されてゆく。4つの物語はそれぞれ異なる魅力を持つが、ここでは第1部の「贈り物」を紹介しよう。どの本にも共通して言えることだが、物語の最初というものは、登場人物の人格や人間関係、情景が詰め込まれており、作者の特徴的な文章スタイルを把握することができるようになっていく。その重大な役目を背負う第1部「贈り物」は、主人公の少年が赤い毛並みの小馬を育てる話だ。そして、これがすべての始まりとなる。

ジョーディは父からしっかり世話をするようにと小馬をプレゼントされる。成長して大きくなったら自分も乗ることができるし、この歳で自分の馬を持っていることは珍しく友達に自慢できるし、嬉しくてたまらなかった。小馬の名前をギャビランと名付け、動物の世話のプロであるビリーに、様々なことを教わりながら大切に育てるジョーディ。そんなある日、雨が心配だったが、馬小屋から出して囲いの中にギャビランを放したまま学校へ行ってしまふ。そしてジョーディの不安が適中して雨が降り出す。ビリーも父も他の仕事で出かけていて牧場にはおらず、ジョーディが帰ると雨の中にたたずむギャビランの姿が。それが原因で小馬は病気になり、みるみるうちに衰弱してゆき看病もむなしく……。

そして、第1部のラストは息も絶え絶えで小屋を抜け出して歩いているギャビランが、ハゲワシの群れに襲われるという悲しいシーン。ギャビランを追いかけてその現場に遭遇したジョーディは、ハゲワシを捕まえ夢中になって殴り殺す。10歳の少年らしくやんちゃなところもあるが、おとなしい性格のジョーディが見せたこの激しい怒りの衝動は読む者の意表をつく。その場に居合わせた父とビリーも驚かされただろう。そのジョーディを厳格な父は冷静にたしなめる。

「おい、ジョーディ、こいつがあのお馬を殺したわけじゃないのだ。おまえ、それがわからないのか？」

それに対してジョーディは

「わかっています」

と、力なく答える。ハゲワシに対する怒りもまだ鎮まっていないときに父から言われた一言。我に返ったジョーディは心の中で、確かにそうだという思いと同時にこみ上げてくる悲しみ、負の感情をコントロールするのに必死になっていたに違いない。父も息子の初めて見た一面に少し戸惑いながらも、かけてやるべき言葉を選び、あえて小馬の死を慰めたりせず、厳しく接したのだ。子の成長を願う父とけなげに冷酷な現実を受け止めようとする少年とのやりとりには深い哀愁が漂い、物語をいっそう感銘深いものになっている。

残りの部でも様々な物事を経験して成長していくジョーディの姿が描かれる。また、作品全体を通して情景描写がこと細かに説明されており、絵でも添えてあるかのようにその状況が頭に浮かび、作品の世界にどっぷりと入り込むことができる。スタインベック自身がカリフォルニア生まれで牧場で働いていた経験があるため、カリフォルニアの大自然、動物に関する深い知識を持っており、それを抜群の表現力で作品に投影しているのだ。スタインベックの別の短編『ハツカネズミと人間』でも同じようなことを感じた覚えがある。これがスタインベックの作品のスタイルであり、スタインベックらしさと言えるのではないだろうか。

『赤い小馬』には、そこに生きている人々のどこにでも存在するような人間関係、会話であったり、繊細な心境の変化であったり、ありのままの現実が描かれている。たとえ10歳だろうと現実の冷酷さは変わらない。過酷な理想と現実のギャップに頭を抱えることも……。しかし、そんな日々でも、新たな生命の誕生や、些細なことで幸せを感じることができる。むしろ辛い時があるからこそ、楽しい時に楽しいと感じられ、喜ぶことができるのだ。カリフォルニアの大自然を背景に、リアルな現実や人間味あふれる登場人物達が描かれるこの物語は、そうしたことを感じさせてくれる正真正銘のヒューマンドラマだ。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 寺地 徹

『赤い小馬』は、ジェームス・ディーン主演の映画「エデンの東」の原作者としても有名な、ジョン・スタインベックの短篇集である。この本は、「贈り物」、「大連峰」、「約束」および「開拓者」の関連ある4つの作品から構成されており、そのなかで評者は、最初の「贈り物」をとりあげている。書評にもあるように、この作品の主人公は、10歳の少年、ジョーディ。西部開拓時代のなごりが残る、カリフォルニアの小さな牧場を舞台に、「馬」をキーワードとするいくつかの物語が展開される。書評では、「贈り物」のクライマックスで、ジョーディが、自分の死んだ小馬を襲うハゲワシを、無我夢中で殴り殺すシーンが紹介されているが、この部分に限らず、評者は登場人物の心の機微の捉え方が的確で、作品の魅力をうまく伝えていると感じた。また、スタインベックの作品に共通するエッセンスを指摘しているのも良い。この書評のおかげで、他の作品にも触れてみたくなった。

入賞者から一言



自分でもこのような賞をいただけることに非常に驚いています。私の書評を評価してくださった選考委員の皆様、このような機会を与えてくださった中西佳世子先生に心よりお礼申し上げます。



第10回 京都産業大学図書館書評大賞アンケートから

書評の応募時にアンケートの回答にご協力いただきました。ありがとうございました。その一部をご紹介します。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ◆ ゼミ等の課題・教員からの推薦。
- ◆ ゼミのみんなで出そうと話し合ったから。
- ◆ 自分の力を試してみたかったから。
- ◆ ゼミの先生からの推薦もあったが、自分自身の成長のためにも必要だと考え、応募した。
- ◆ 去年も応募して、書評を書くことで普段読むよりも内容を意識して詳しく読み込むことができると感じたから。夏休みの思い出として。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- | | |
|--------------|-----|
| ◆ 話題の本だから | 11人 |
| ◆ 先生からの推薦・指示 | 34人 |
| ◆ 図書館で見つけたから | 8人 |
| ◆ 好きな作家だから | 10人 |
| ◆ 興味のある分野だから | 24人 |
| ◆ その他 | 4人 |



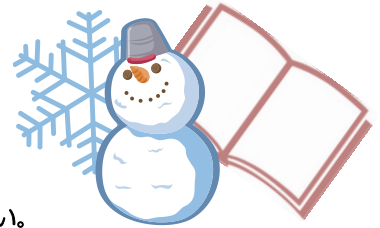
Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(49人)(理由)

- ◆ 自分の考え、筆者の主張を明確にし、文章に起こすことで、より一層理解を深めることができたから。
- ◆ 自分の伝えたいことや文章を書く練習にもなるので、機会があればまた応募したい。読後の感想等を多くの人と共有する良い機会だから。
- ◆ 普段は小説などの本を全く読まないが、応募することで読むきっかけになったから。自分の文章を評価してもらえる機会があまりないから。
- ◆ 自分の文章力を高める良い機会になると思ったから。

「いいえ。」(26人)(理由)

- ◆ 来年は就活だから。
- ◆ 1,600字は多くて大変。
- ◆ 卒業するから。



Q4) 執筆してみての感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- ◆ 提出方法がちょっとややこしかった。
- ◆ 普段読み終わった本の内容について考えたりすることがあまりなかったので、思っていたより楽しかった。いろんな人の書評も読んでみたいと思った。
- ◆ 本をあまり読まないのでも、読むいい機会だった。
- ◆ その本の良さや自分の感じたことを簡潔に読みやすくまとめるのは難しかったが、書き上げたときに大きな達成感を得ることができた。
- ◆ 読書感想ではなく、他の学生に書籍の内容を伝え興味を持ってもらう書評というスタイルの文章の作成を初めて行い、難しかったが文章力を高める良い機会になった。
- ◆ 読み手に対して、この本の面白さをどのように文で表現すればいいのか悩み、難しかった。

Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

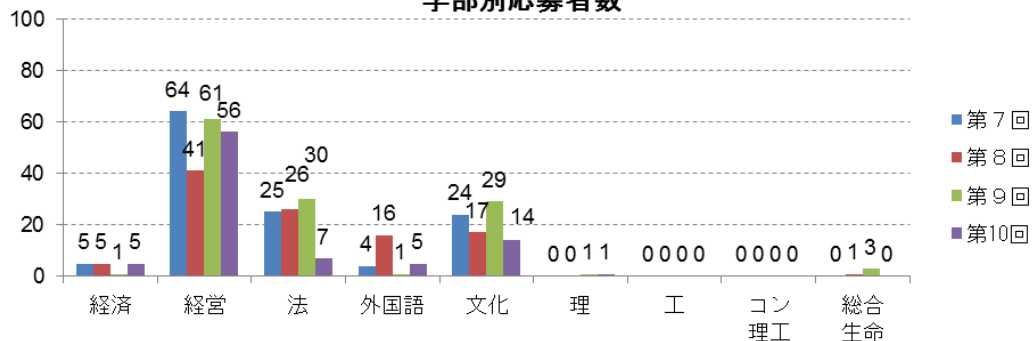
- ◆ 村山由佳氏が来られたのは良かった。これからも有名作家を呼んでほしい。
- ◆ 「読書が人生をいかに豊かにするか」をぜひ後輩たちに感じて欲しいので、気軽に参加できる楽しい講演会をしてほしいです。

—希望する講演会講師—

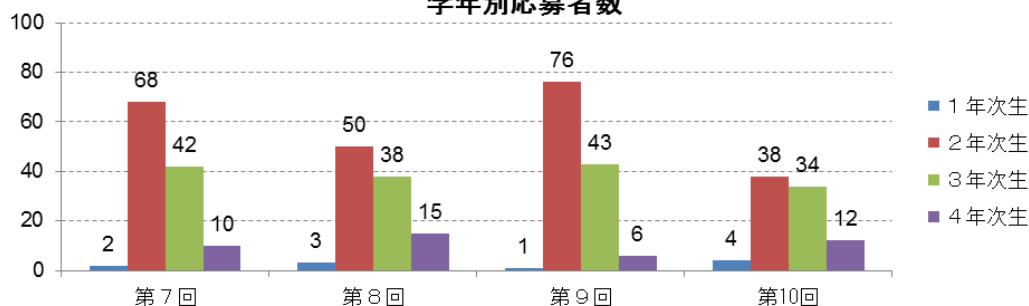
辻村深月・百田尚樹・西村賢太・村上龍・町田康・金井美恵子・疋田龍之介・三田誠広・高橋源一郎・奥泉光

第10回 京都産業大学図書館書評大賞 統計

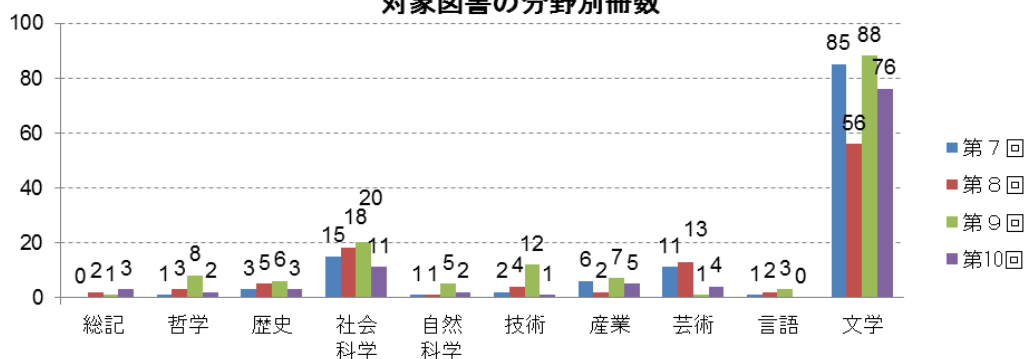
学部別応募者数



学年別応募者数



対象図書分野別の冊数



書評大賞の応募者は残念ながら、昨年度人数比で約30%の減となり、学部別応募者数は、経営学部・文化学部・法学部の順となりました。これまで、理工系学部応募者は少数ですが、入賞される確率は高く、論理的な記述が書評には向いているのかも知れません。今年は減となった法学部・文化学部の応募者数の復活や理工系学部からの応募が増えることを願っています。

学年別では、2年次生の応募が半減しましたが、1年次生の応募が増加に転じました。過年度3年連続入賞者の記録を塗り替える4年連続入賞を目指すなど、1年次生からの挑戦に期待します。

対象図書の分野別では、文学の選択が多く、次いで社会科学という傾向は継続しています。

第10回 京都産業大学図書館書評大賞 概要

目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領（抜粋）

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1篇につき1,600字以上2,000字以内。原稿はマイクロソフト社のWordを使用して作成すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること。（盗用厳禁）
- (4) その他：1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

88名 107篇

実施日程

応募期間 平成26年 7月 1日（火）～ 9月17日（水）
入選発表 平成26年11月28日（金）
表彰式 平成26年12月17日（水）



選考委員より ひとつこと

研究論文では、外部の査読者からコメントをもらい、それをもとに修正をするという流れで論文の完成度を高めていきます。同様に、書評についても、他人に見てもらおうということを重視してほしいと感じました。（北村）

普段、小説は読まないのですが、小説を読む良い機会、それも面白い小説を読む機会を与えられたことに感謝します。評者の皆さんには、これからも良い書評を通し、良い図書を紹介して欲しい、と思います。（柳下）

選考委員を務めたおかげで、いろんな本を知ることができた。そういえば、日経には「半歩遅れの読書術」という書評欄があるし、他の媒体にも必ず書評がある。良書に出会う情報源として、書評の価値を再認識した。（寺地）

応募作品が様々な分野にまたがり、学生の読書傾向を知る上では興味深かった。ただ、文学に関しては、授業などで文芸大作を読んでいるはずなのに、短編小説や、ミステリーに応募が偏る傾向があった。学生の幅広い応募をどう促すかが今後の課題だろう。（鈴木）

図書館委員として、自分が図書館での選書にかかわった本が、学生さんによって書評されるのはうれしいものです。もちろん、それによって書評への評価が左右されることはありませんが。どうぞ図書館を利用してください。（中山）

書評と実際に読んだ対象図書の内容とに違和感を感じた作品がありました。独自の視点での批評だけでなく、読解力も大切だと思っています。久々に選考にたずさわり、新たな書評と出会えたことに感謝します。（池田）

書評とは何か？書評と読書感想文との違いは？これらの問いに対して、毎週日曜日の新聞各紙に掲載される書評や本学図書館所蔵の『ニッポンの書評』（豊崎由美著、光文社、2011年）は手がかりになると思います。（今井）

今、読書会に興味があります。同じ本を読み語り合う会です。映画を観た後で語り合うことは、図書館の上映会で実施中です。自分と違う視点を知ると好評です。読むだけで終わらず、書いたり話したりしてみませんか。（近江）

本を選ぶことから始まって、読んで、考えて、書き出して、まとめて、整える。それから投稿。一つの作品にこれほどまでに時間をかける経験はどのくらいあるのでしょうか。未知の知識に触れた、知識を深めた、次回作にも期待します。（真部）

文章って面白いと思います。これだけたくさんのお応募があって、それぞれの作品ごとに個性がありました。たくさん本を読んで、たくさん文章を書くことで、皆さんの文章のスタイルが見つかると思います。（磯谷）